

B・B（望まれた爆弾魔）

馬場悠光

1 B・Bとボブ・ボーム

都内某所。その日は休日とあってか、大勢の人々が行き交っていた。そこにある物体の足元に、小さな白い紙袋が一つ置かれていた。誰もがその存在に気づいても気にもとめず、仮にとめたとしても「誰かの忘れ物だろう」と考え、素通りした。そんな中、真っすぐ紙袋に歩み寄る男がいた。年齢は三十代半ば。身長は日本人男性の平均よりやや高く、身体は服の上からでも分かるほど厚い筋肉に覆われている。男によって紙袋から取り出されたそれは、新聞紙に包まれ、やや横に長い形状をしていた。耳を澄ませば紙の向こうから微かな電子音が聞こえてくる。その正体を察した男は大声を上げて周囲の人々に注意を促したが、次の瞬間、男の持つそれは業火、衝撃となって男や周囲の人々を包み、吹き飛ばした。六名の死

者と二百十一名の重軽傷者。これが爆弾魔B・Bを名乗る男の最初の爆破事件となった。

ボブ・ボームは2000X年、アメリカ合衆国ニューヨークシャー州で、家電量販店を営む両親のもとに生まれた。幼少期のボームは屋外でのスポーツよりも、屋内でのテレビゲームやパソコンを好む少年だった。物静かな性格ゆえ、時に気の強い少年達にからかわれたが、自ラトラブルを起こす事もなかったため、友人もそれなりに多かった。勉強も良く出来たボームはマサチューセッツ州の大学の工学部に進学し、在学中であるにも関わらず、一流企業から一目置かれるほど優秀な成績を収めた。友人に恵まれ、輝かしい将来も約束されたボームが、なぜ極東の島国で数多の死傷者を出した連続爆破事件の根源となったのか。彼は内なる快楽殺人者だった、悪魔崇拜者だった、共犯者の手先に過ぎなかった、はたまた冤罪だった——様々な説が飛び交ったが、逮捕前にボームが自ら命を絶った今、それらは全て憶測の域を出ない。

2 望まれなかった奇跡

警察機動隊爆発物処理班では優秀な隊員。家庭では幼い息子の遊びに付き合う良き父親。そんな二つの顔を持つ番田翔馬が今、車中で睨みつけていたのは一枚の紙片だった。今朝、爆弾魔B・Bを名乗る人物から番田に送られてきた挑戦状だった。

『本日正午、この街のどこかに仕掛けた爆弾を爆破させる。阻止したければ、爆弾のありかを示した以下の暗号を解いてみろ』——そんな旨の文言と共に、次のような文字と数字が記されていた。

『触らぬ神に祟りなし』

(-3、+25、+8、+24、-10、-3、-13、+26、+13、+3、-20)

暗号自体は簡単だ。まず『触らぬ神に祟りなし』を、平仮名の『さわらぬかみにたたりなし』に変換する。そして、特定の表を基に-3や+25といった数字にしたがい、

一文字ずつ動かしていく。……解き方さえ分かれば大した事はないが、問題はその『特定の表』が分からない点にある。

とりあえず番田は脳裏に五十音表を思い浮かべ、数字にしたがって文字を動かしていく。しかしすぐに「これは違う」と見切りを付けた。『わ』の+25文字は無理に引き延ばしたとしても完全に濁音、半濁音まで掛かり、『ら』の+8文字はワ行の『る』に掛かる。五十音表でも空白扱いされるような曖昧な文字を暗号に使うとは思えない。それでも、ヒントが明記されていない以上、解読の鍵となる表は世間一般に広く知られている事は間違いないだろう。

車のシートに身を沈め、眼を閉じて考え込んでいると、ふと昨日の夕食時の光景が浮かんできた。

「パパは『いろは歌』って知ってる？」

カレイの煮付けの骨を取り除くべく格闘していた番田に、そう問い掛けてきたのは彼の一人息子だった。妻に似て聡明な、自慢の息子だ。

「大昔の人が作った詩なんだけど、全部の文字がちよう

ど一つずつ使われているから、昔は『あいうえお』の代わりに使ってたらしいよ」

ヒントはこんな所にあった。今度はいろは歌を脳裏に思い浮かべ、文字を動かしていく。

さ↓え、わ↓き、ら↓ま、ぬ↓え、か↓と、み↓け、に↓い、た↓は、た↓し、り↓ら、……えきまえとけいはしら（駅前時計柱）。ここまで解ければ、残りの二文字は解くまでもない。どの駅にも時計ぐらいはあるだろうが、この辺りの駅前で印象的な時計があるのはK駅のみ。爆弾はそれの柱付近に仕掛けられているのだろう。

番田は車のエンジンをかけ、ハンドルを握った。爆弾を爆発させる訳にはいかない。

一時間ほど適当に車を走らせた後、K駅近くのコインパーキングに車を停めた。車内の時計を見ると、爆弾の爆発予定時刻まであと十分を切っていた。

——少し寄り道をし過ぎたか。だが、爆発寸前のタイミングで現れた方がB・Bも喜ぶだろう。

休日とあってか、駅前の広間は幼い子どもを含め、大勢の人々が行き交っていた。

——もし本当に、こんな所で爆弾が爆発しようものなら、甚大な被害は避けられないな。

そんな事を考えながら、番田は時計へ真つすぐ歩み寄った。茶色の細長い柱の上に、黒いアラビア数字が印字された、白い円形の文字盤のシンプルな時計。その足元には、茶色の紙袋が置かれていた。

これだ。

そう確信し、袋から中身を取り出すと、それは更に新聞紙に包まれていた。番田は無造作にそれを剥がしていった。

中身が露わになった。束になった数本の黄色い管から、それぞれ一本ずつ青いコードが伸び、赤いデジタル数字が映し出された黒い画面へと繋がっている。微かな電子音が鳴って、そのたびに画面の数字が減っていく。爆発まで、残り時間はおおよそ五分。

——やけに本格的な作りじゃないか。

番田が口元に笑みを浮かべたその時、背後で幼い子どもの声が出た。

「パパ……何してるの？」

振り返ると、そこには息子の万騎^{ばんき}が立っていた。その表情は明らかに困惑に満ちている。番田が言葉を発そうとした瞬間、時計の柱から聞き慣れた電子音が響いた。反射的にその方を見ると、マグネットの磁力で時計の柱の裏に張り付いたいつもの爆弾……もとい、キッチンタイマーが、けたたましいアラーム音を発していた。

——なら、今、俺が手に持ってるコイツは？

「……パパ」

「近寄るな！ 離れてろ！」

その正体を瞬時に察した番田は、片手を突き出して万騎を怒鳴りつける。その目は子煩悩な父親のものではなく、優秀な機動隊員のものだった。

3 犯行声明

六名の死者と二百十一名の重軽傷者を出したK駅前の爆発から数十分後。インターネットの動画サイトにB・Bを名乗る犯人からの犯行声明が投稿された。

『皆様こんにちは。そしてお久しぶりです。先ほどK駅

前で発生しました爆発は、私が仕掛けた爆弾によるものでございます。なぜ私がこのような事件を起こしたのか、一言で申しますと「皆様がそう望まれたから」とでも言いたいでしょうか。おめでとうございます。本日、皆様の望みが叶い、晴れて私は本物の爆弾魔となりました。ご安心下さい。今後も私は全国的な範囲で皆様の期待に応え続けます。

……えっ、何ですって？ 次の爆弾の在処を教えてください？ ……あのねえ、考えてもみて下さい。本気で爆発させたい爆弾の在処を、たとえヒントだけでも教えるとは思いますか？ そんなヒントや暗号を教えてくださいるのは、他愛もない遊びに興じる無邪気な子どもだけなんです。……もつとも、そんな子どもはもういませんがね。それでは皆様、覚悟をしておいて下さい』

4 望まれた爆弾魔

優秀な警察官、心優しい父親から凶悪な爆弾魔へ。番田翔馬ほど数奇な転身を遂げた者も珍しいだろう。

当時、番田とその息子の万騎は休日になると、街全体を使ってゲームに興じていた。万騎が自身の頭文字から取った「爆弾魔 B・B」を名乗り、爆弾に見立てたキッチンタイマーを街のどこかに仕掛け、その場所を示した暗号を探偵役の父に渡し、父が制限時間内にその暗号を解き、「爆弾」を止めに行く——無邪気な子どもと、大らかな父親による他愛もない遊び。それ以上でも以下でもない、父子の交流であった。

その日も二人はゲームに興じていた。だが、いつもと違ったのは、息子がタイマーを仕掛けた場所と、アメリカ大学生ボブ・ボームが本物の爆弾を仕掛けた場所が偶然にも合致してしまった事だった。

だが、それは奇跡だった。多くの生命が奪われる本物の爆弾の爆発は、その知識がある番田が見つけ、解除した事で、未然に防がれたのだ。

しかし、世間はその奇跡を信じなかった。治安が良いとされる日本にわざわざアメリカ人がやって来て爆弾を仕掛け、たまたまそれを子どもとの遊びの末に警察機動隊爆発物処理班に所属する警察官が発見し解除する……

そんな偶然の連続に、人々は裏があると疑った。「ボブ・ボームと番田翔馬は実は裏で繋がっており、K 駅前の爆弾騒動は彼等の自作自演だ」「全ては番田翔馬の仕業で、ボブ・ボームはスケープゴートだ」。テレビやネットではそんな噂がまことしやかに囁かれ、番田は激しい誹謗中傷にさらされ、警察を辞めざるを得なくなった。

人々が抱いた疑念を、警察が抱かないはずがなかった。警察は番田とボームの関係を徹底的に捜査したが、二人の関係を示す証拠は何一つ見つからなかった。当然である。番田とボームとの間には、本当に何の関係もなかったのだから。警察はK 駅前の事件を、事件後間もなく、滞在先のホテルで自死したボームの単独犯であると結論づけ、世間に公表した。だが、人々はそれも信じなかった。「警察は身内だった番田を庇っている」とし、更に攻撃を加えた。

人間は真実よりも、真実であって欲しいと望む物事を信じる。凶悪な爆弾魔像を知られざるアメリカ人ではなく、善良な警察官、父親に求めた。真偽などどうでも良かった。これが人々が納得し、好み、望んだ真実だった。

攻撃は番田本人だけでなく、その家族にも及んだ。家には連日マスコミが押しかけ、誹謗中傷の電話や小動物の死骸の入った配達物が届いた。ある日の朝、いつまで経っても起きて来ない万騎を、番田の妻であり万騎の母親が部屋まで起こしに行くと、彼は手首を切って息絶えていた。傍らの遺書には、自身の遊びが原因で父が爆弾魔と疑われ、警察を辞めざるを得なくなり、誹謗中傷に晒される事になってしまった事を詫びる言葉が、ひたすら綴られていた。案の定、マスコミや野次馬は万騎の通夜、葬儀が行われた斎場にも現れ、中には罵声やゴミを番田と妻、亡骸となった万騎の乗る霊柩車に投げつける者もいた。怒りと絶望に震えながら、番田は車窓からそんな連中を睨みつけた。

——俺は粉骨碎身、世のため人のため尽力してきた。あの爆弾を解除したのだから、純粹に被害を防ぎたかったからだ。それなのにあの恩知らず共は……そうだ、奴らのせいで万騎は死んだ。俺が今まで守ってきたのは、守る価値のない、人の形をした獣だったのだ。

人間は強い信念が裏切られた時、激しく崩壊する。番

田も例外ではなかった。

——ならば、奴らの望む通りにしてやろう。この俺に爆弾魔になって欲しいのなら、なってやろうじゃないか。隣で息子の遺影を抱く妻は、もはや現実を認識出来る状態ではなかった。

全てが始まったK駅前で最初の爆破事件を起こした後、亡き息子にあやかってB・Bを名乗り始めた番田は、声明通り全国各地に爆弾を仕掛け、それを爆破させていった。コンサート会場、列車の線路上、飛行中の旅客機——無差別な爆破もあれば、番田一家を誹謗中傷した個人やマスコミ関係者のもとに爆弾を送る事もあった。番田の古巣である警察も全力で彼を追ったが、その手の内を知り尽くした元警察官の爆弾魔を捕まえる事は叶わなかった。

——B・Bは、番田は全ての人間を殺し尽くすまで止まらないのではないか。誰もが何かしらの被害をB・Bから被り、人々の頭をそんな思いが支配した頃、意外な形で事件は終息を迎えた。アメリカからボブ・ボームの両親が来日し、メディアを通して番田に対し、犯行を止

めるよう呼びかけたのだ。

その呼びかけから一日も経たない内に人気のない浜辺で、番田は自らに爆弾を仕掛け、爆破させた。それが、人々から望まれて爆弾魔となった男の最期だった。

わずかに残ったDNAから、爆死したのは番田であると特定した警察は、その死を世間に公表したが、人々は「警察の公表は嘘だ。番田は今もどこかで生きている」と、また自分好みの物語を創り、語り、信じたのだった。

了